

タゴールの詩——ヒューマニズムのバラード

バラティ・ムカジー
前川健一 訳

歴史には時として、鮮烈な人格が登場します。彼らは、全ての醜悪・卑小・俗悪を焼き尽くし、文明を目くるめく高みへと導きます。このような人格は、彼らが最初に生を享けた、狭小な地理的限界に制限されるものではありません。彼らにはヴィジョンがあり、使命があり、行動があります。それによって、自らが「普遍人」であることを明らかにするのです。彼らは、人間にとって価値あるものを高く掲げています。真理、愛、美、自制、調和、そして、永遠の中での究極の運命を追求し続けることです。このようなヒューマニズ

ムの預言者たちの星団の中で、ラビンドラナート・タゴール⁽¹⁾、母なるインドの吟遊詩人は、その最前列を占めています。

タゴールは無限の次元を持つ人物です。彼は詩人・作詞家であっただけではありません。同時に、散文作家・劇作家・画家・演技者・社会改革者・教育者であり、さらにそれら以外のものでもありました。しかし、すべての創作と活動の基調にあるのは、「人間」への愛です。彼は情熱的なインド人でしたが、彼のナショナリズムは普遍主義へと超越しています。そこに見出さ

れるのは、東西両洋の最善のものが独自の仕方で融合したものです。この論文で、私はささやかながら、タゴールのヒューマニズムの哲学の一端を描き出してみたいと思います。もし「詩的」という言葉が、真理・美・調和・音楽などの統合を指すのであれば、おそらく彼の全ての文学的創作はその言葉に値するでしょう。しかし、この論文では、当然のことながら、彼の詩歌のみを論じることになります。

一八六一年五月七日、ラビンドラナートはコルカタ（カルカッタ）のジョラシャンコに生まれました。タゴール家は、豊かで教養もある貴族の家柄でした。この時期、インド、とりわけベンガルでは、「ベンガル・ルネサンス」として知られる大規模な文化革命の真つ只中でした。それは、何世紀にもわたって閉ざされていた扉を開けるものでした。新しい理念、新しい思想、新しいアプローチの仕方が探求され開拓されねばなりませんでした。その対象は、生を美しいものにし、生きる価値あるものにする全ての領域にわたっていました。

ジョラシャンコのタクルバリ（タゴールの家）は、こ

うした文化的再生の拠点でした。そこでは、合理主義・ナシヨナリズム・ヒューマニズムといった基本的な価値観が育まれていました。ラビンドラナートは、子どもの時から、家系と環境の両方からの影響で、これらの価値観を吸収していました。そして、生涯にわたる創作によって、それらを世に宣布していったのです。

彼の父デベンドラナートは、「マハルシ（大聖）」と呼ばれたほどの宗教的人物でした。⁽²⁾父の影響のもと、ラビンドラナートは、ヴェーダーンタ哲学やウパニシャッドの教えに親しむ環境で成長しました。長じて、彼はヴィシシュタ信仰の神学や中世のバクティ信仰⁽⁴⁾の聖者たち——カビール、ラビダース、ダードウー、ナーナク等——に強い感銘を受けました。スーフイー⁽⁵⁾の聖者たちも彼を魅了したものです。愛・美・真理・平安・調和などへの渴仰を通じて、究極的なものへと至ろうとする、こうした哲学の香氣こそが、タゴールのヒューマニズムの哲学の精髓を成しているのです。

タゴールは十三歳で文学活動を始め、その後六十七

年間にわたり、滾滾たる創造力は、多彩な分野に奔流のようにあふれていきました。

文学活動の当初、タゴールはロマン派の詩人であり、幾分かは神秘主義的な詩人でした。彼は美を崇拜していました。それ故、自然の中の美は何であれ、若い詩人の心を震わせるものでした。季節の移ろいに詩人の心は孔雀のように踊り、滝を下る水流に彼の眼は夢から醒め、冬眠⁽⁶⁾している大地を歓喜に染める春の訪れに、詩人もまた喜びに満ちるのです。自然の美の只中で幸せに浸る詩人からは、こんな言葉が生まれます。

この世界は美しい

甘やかな土ほこりをひとつまみ

私は心の中におさめる

生の素晴らしさを伝えるものだから

この段階では、詩人は熱愛者です。当初、彼の愛は、多かれ少なかれ、地上的なものでした。『プレーマ（愛）』と題された一連の歌と多くの詩の中で、愛する者への

情熱的な愛と渴望は美しく描かれています。二つだけ引用しておきましょう。

愛の満ち潮の中を二人はただよう。束縛するものは何もない

会えない日々は痛みとともにすぎていく。まどろ

みの夢でだけ

全ての道はついに一つになる、あなたの瞳を目指して

しかし、ほどなく、このような情熱的な形而下的な愛は天上的なものへと超越します。愛は多幸症ではなく、何ら生物学的な含意もありません。詩人自身は彼一流の仕方であを定義しています。

ああ、この謎めいた

とらえがたい遊び

私は知っていたのだ

呼吸のように単純で、笑顔のように簡単に

大地よりも時を経た、この歓びを

今や詩人の愛は質的に異なったものになりました。

より崇高になったのです。この段階で、詩人は、有限なるものと「無限」との真の関係を探求しています。

「待ち望むもの」に触れようとする欲求の中で、詩人は阻隔の苦痛を感じています。注意しなければならぬのは、この段階では、欲望の対象と「待ち望むもの」とは異なった二つのものとして認識されていることです。詩人はつぶやきます。

ただ一人、我はさまよう

大宇宙を、無限の天空の中を

とこしえに。

世の父なる御身よ

全き孤独に坐し、無言のままに

聖処に身を隠す御身よ

大なる偉観と無尽の謎につつまれて

第二の段階では、この阻隔の感覚が詩人を苦しめ、終わりのなき苦しみのみが救済をもたらすとの強迫観念が詩人を襲います。『夕べの歌』の中で彼はこう記します。

苦しみよ来たれ、我に来たれ

この心を占むるは孤愁のみ

そして彼は叫びます。

主よ、我に更なる苦痛を与えよ

我が痛覚をして更に鋭敏ならしめよ

扉を開け、全ての障碍を打ち倒し

我を救いたまえ、我が主よ

詩人には次第に次のことが分かってきました。個人的な自我を全体性へと没入させることのみが、彼にとって「待ち望むもの」への接近をもたらすということ

がです。有限なるものと「無限」との間には有機的な関係があると、彼は確信しました。両者の完全なる合一をもたらすのは、完全な自己滅却、完全な自己消去、自己意識の否定です。愛が両者を結ぶ紐帯です。この段階で、『ギタンジャリ（ギタンジョリ）』『歌の花環』『音詩』『献納』『捧げ物』、さらにその他同類の作品群も含めて、比類なき詩歌が生まれたのです。

変貌を遂げたタゴールは誓います。

あなたを魅惑するものは私の美しさではない

愛が、あなたを魅了する

扉を開けるものは手ではない

歌声が扉を開ける

こうやってもたらされた完全な依存感情の中、彼はつぶやきます。

御身は我を終わり無きものと為せり、其は御身の

喜びなれば

はかなき此の器を空ろに為せり、いくたびも幾度も

御身は満たせり、倦むことなく、新しき命もて⁽⁷⁾

ここで訪れるのは、救済という目的にいたるための、熱狂的で完全な自己放棄です。詩人は語ります。

あなたに差し上げるべきは

私の全て。そうですとも

私の持ち物の全て

私の思いの全て

同様に詩人は祈願します。

お許しください、大地に伏すことを

全き喜びに震え、おみ足のすぐ下に伏すことを

お許しください、衣を赤く染めることを

おみ足が触れた埃によって

有限なるものの中で

あなたは曲を奏でる

「無限」よ、だからこそ

あなたの調べはここちよい⁽⁸⁾

しかし、救済を熱望することは、現世を放棄することではありません。地上的な意味で享楽にとらわれていることの中にも、彼の自由は見出されます。『捧げ物』の中で、彼は記しています。

解放は放棄の中にある、私にとつて

自由を抱きしめたと言えるのは

幾千ものとりわれの中、享楽へのとりわれの中

この自由は、「無限」という完全なる全体へと向かいます。それは有限なるものにある最善のものを統合強化したものです。それ故、「無限」は真理・至福・美であり、そして歓喜を本性としています。こうした美質を一つにすることで、完全な調和が生まれます。これが「絶対者」です。この完全な自由は、人間を有限なる状態から「無限」との合一へと導く鍵となるものです。彼は語ります。

この完全な自由を求める永遠の探求、これが人間性の本質をなすものです。この次元によって、タゴールの調和とヒューマニズムの哲学には特別な芳しさが加

わります。これが「人間」を偉大にするのです。

この段階で、彼の詩藻には重要で質的な変化が生じます。今や彼は自らを同朋の中の一人として認識しています。ロマン主義と神秘主義から離れ、詩人が受け止めるのは現実生活と現実世界の手応えです。だからこそ彼は記すのです。

友よ来たれ、君が来れば、骨折り仕事も何のその

.....

来たれ、人ごみのただ中から

君よ、僕と一心同体の

君よ、僕を本当の名で呼ぶ者よ

詩人は大衆と完全に一つになることを熱望します。
彼は記します。

僕の名を知ってほしい

僕は君たちの一員なのだ

『心の女』『黄金の小舟』『絵のような女』、これら一連の詩集は、この精神の所産です。彼は自らの気持ちをこう表現します。

今日、僕の心は何と開け放たれていることか

世界はここにやって来て、僕の心を抱きしめる

ここで初めて、詩人は、同朋に対して何らかの責任があることを覚ります。彼は朗々と呼びかけます。

詩人よ、来たれ、命があるのなら

それを携え、捧げよ

今日のこの日に⁽⁹⁾

今や詩人は虐げられた人々の鼓動を感じ、彼らの中に「生命神」を見出します。舞踊劇『不可触民の女』、詩「埃の中の寺院」や「純粋」その他同様の作品の中で詩人が喝采を捧げるのは、社会の周縁に追いやられ労苦している人々に対してです。彼は語ります。

誰を、あなたたちは礼拝しているのか、何も言わずに

眼を開けて見たまえ

あなたたちの神はそこにはいない

神がいらっしゃるのは、農夫が耕す大地

神がいらっしゃるのは、石を刻み

拓かれていく道

……………

どこであなたは自由を得るのか
主御自らが縁を切られることはない

御自身が創られた全てのものと

詩人は社会機構を非難し、周縁に追いやられた人々への嫌悪を誡めます。

「おまえは触るな」という時

あなたが嫌っているのは、彼の中の神

飢饉の扉で、造物主は怒り苦しむ

なすべきことは、食べ物を運び、他と分かち合う

こと

.....

あなたが突き落としたものが、あなたを引きずり

下ろす

あなたが見捨てたものが、あなたを引き戻す

詩人は彼の主に感謝を捧げます。それは、彼が卑賤な人々とともにいるという運命に対してです。彼らは支配階層からの圧迫を耐え忍び、暗がりの中で顔を隠し、すすり泣きを抑えているのです。

普通の人々との一体感、抑圧され隷従させられたものへの同情、こうした詩人の感情が向かう先は、人間社会のもう一面、すなわち女性でした。心の底から詩人は強く信じていました。それは、女性の人格と潜在力が十全に発揮されない限り、社会が幼年期を脱することは不可能であるということです。そして、もしそうなってしまうと、社会機構から調和は見失われてしまふだろう、ということです。舞踊劇『チットランゴダ』や戯曲『赤い夾竹桃』では、永遠に女性的なるものが持つ力・精神・断固たる態度などが美しく描かれています。「サバラ」という詩で、女性は次のように問いかれます。

我が運命よ、どうして私から

女性の権利を奪うの

最上の財たからを敢然と勝ち取るための権利を

ベンガル・ルネサンスの使徒として、タゴールは神よりさらに高い地位を「人間」に与えました。彼にと

って、「人間」は造物主の創造者なのです。彼は語りま
す。

私の思いに染められて

エメラルドは緑になる

ルビーは赤くなる

私が目を開けて空に向かえば

東の空が明るくなる 西の空が明るくなる

私が見て「美しい」と言えば

薔薇は美しくなる

「人間」にとって、これ以上の賛辞があるでしょう
か！ これ以上に人間性を賛美することができるでし
ょうか！

人間の自由を主唱した彼は、一貫して平和の探求者
でした。彼は、暴力が人間の魂を絶息させることを信
じていました。いつ・どこであっても、暴政・抑圧が
あり、暴力が振るわれ、人間が搾取されている場合、
彼はペンを剣として振るい、激烈な抗議を行ったので

す。二度の世界大戦で示された非人間的な獣性、資本
主義の不均衡な発展がもたらした傲慢と搾取、ナチス
とファシストによる侵略、スペインにおける民主主義
の抑圧、日本による「満洲」侵略、こうした全てのこ
とが、『ギタンジャリ』の作者の静謐で平穏な心をかき
乱します。愛想も尽き果てたばかりに、詩人は嘆息
しています。

「蛇どもの吐く毒気が

あたり一面に広がっている」

非常に繊細で詩的な手段を使ってはいましたが、彼
が極めて雄弁に両大戦中のヒューマニズムの敗北に抗
したことは広く知られています。また、アインシュタ
インやロマン・ロランその他の闘士たちと「世界平和
憲章」に署名したのも周知のとおりです。

彼はまた、あらゆる形態の機械文明に反対しました。
それは人間にとって自然な環境を破壊し、搾取的な資
本主義の基盤となるものだからです。文明の全面的危

機の中、戯曲『自然の流れ』や『赤い夾竹桃』では、彼の大きいなる不満が表明されています。

今日の世界は憎悪に荒れ狂っている

紛争は残酷で、苦悶に終わりは無い

道は曲がりくねり、貪欲でがんじがらめになって
いる

ジャリヤーンワラー・バーグでの英国の蛮行に抗議して、彼は「ナイト」の爵位を返上しました。帝国主義に対する彼の抗議は母国の範囲にとどまりませんでした。植民地主義の圧政に苦しむアフリカに向けて、彼は苦悶とともに宣言します。

文明人の野蛮な貪欲は剥き出しにした

恥知らずな人でなしの心根を。

あなたたちが涙しても、その叫びはかき消される

森の小道はぬかるんでいく、涙と血で

怒りのあまり、詩人は彼の主に問いかけます。

あなたの空気を汚し

あなたの光を遠ざける

彼らを赦し愛されるのですか⁽¹⁰⁾

平和を求めて、彼は最後には仏世尊に慰めを見出します。

御身は菩提樹のもと大覚を成就されたまえ

……………

無量の梵音もて宣べしめたまえ

限りなき慈愛の福音をして御身の招命を⁽¹¹⁾

人間の自尊心を奪う抑圧や不正に敢然と抗議する精神、これがタゴールのヒューマニズムに卓越した次元を加えています。

ラビンドラナートは、紛れもなく、詩人であり哲学者です。しかし、生まれ持った人間愛から、彼は同

時にインド人でもありました。彼はインド人であることに誇りを持っていました。

私は幸せだ、この国に生まれて

この国を愛する幸運を持てて

自然に対して彼はロマン派的な見方をしていました。生命に対するアプローチは神秘主義的で超越的でした。にもかかわらず、植民者たちがもたらした憎悪・屈辱・搾取などに接し、彼の愛国者としての心は激しく傷つきました。彼の疲れを知らぬベンからは、途切れることのない詩歌の奔流が溢れました。社会的責任を担って、タゴールはベンガル地方の政治活動に関与しました。ガンディー・ジークの建設的なスワデーシ（国産品愛用）運動を支持しました。ここではこの点に詳細に立ち入ることはしませんが、私が言っておきたいのは、彼にとって、東洋世界の生命は先細りする小川のようなものだったということです。それは優美で柔軟で慎ましかです。今もインドに脈々と受け継がれ

る「生命の流れ」を感じるためには、インド自身の文化遺産と伝統の残響を受け止め、はつきりさせ、再興・再組織・再活性化することが必要です。それによって、インドがどうなるか。詩人は次のように言います。

心は恐れなく

頭は高く掲げ

知は自由であるところ

狭小な国境の壁が

引き裂いてはいない場所⁽¹³⁾

しかし、こうした情熱的なインド主義によって、タゴールが偏狭なナシヨナリズムに落ち込むことはありませんでした。彼は生まれから言えばインド人でしたが、認識の上では世界市民でした。彼の目標は、ナシヨナリズムの潮流を、ナシヨナリズムを超越する普遍主義へと導くことでした。そのためには、人間の魂を全ての束縛と卑小さから解放し、普遍的な愛と同朋意

識の探求へと超越させねばなりません。タゴールは私たちにインドのモットーを思い出させてくれます。それは「多様性の中の統一」です。タゴールのヴィジョンでは、インドは世界人類の巡礼地であり、幾世紀にもわたる多様な差異の只中でそれを総合し統一しているのです。彼にとってインドは次のような場所です。

アーリヤ人、非アーリア人、ドラヴィダ人、中国人

サカ族、フン族、パターン人、モンゴル人
みなが溶け合って一体になる

今や西洋は扉を開き、贈り物をもたらしただけ
全ては手渡され、受け取られ、交じり合う
値打ちを下げるものは誰もいない⁽¹⁴⁾

このことは以下のことを示しています。タゴールは情熱的な探求を続け、インドの遺産を通じてインドを再発見しました。それはまたインドの本質をその根底にある人間性に見出すものもありました。こうした

タゴールのインド観全体が、彼のヒューマニズムの哲学を国際主義の静謐な色合いで染め上げているのです。このようにして、詩人は「人間」へと到達します。この「人間」は世界全体の幸福のために平和・調和・真理を探求しつづけるのです。

現在の世界は、偏狭な宗派意識・地域独立運動・地方分権・言語的優越感などにより絶えず断片化の危機にあります。グローバル化の負の反面である貪欲な消費志向に踏みにじられ、平和は力を失っています。無計画な技術使用が積極的になされることで、調和は不断の危機に瀕しています。このような時、このような場所だからこそ、タゴールの詩は、その美と光彩によって我々を慰藉し、唱えるべき聖句を与えるのです。

おろおろすれば

値打ちをさげる

取り越し苦労で

しょんぼりするな

苦難に満ちた人生の旅路で、雷雨の夜にも灯がなければ、タゴールこそが道案内です。彼の詩は、世界平和・調和・人間性というメッセージによって、人類にとつての永遠の灯台なのです。

※訳出にあたって、タゴールの詩については、気づいた範囲で可能なかぎり先行の訳業を参照し、大いに裨益を受けたが、ムカジー氏が引用している文脈と合わない場合もあり、最終的には訳者が自分の判断で訳出した（訳者記）。

注

- (1) ベンガル語での発音に近い表記は「ロビンドロナト・タクル」だが、以下では、一般的に「ラビンドラナト・タゴール」という表記を使用する。
- (2) デベンドラナート（一八一七―一九〇五）は、ブラフマ協会の指導者として、ウパニシャッド回帰にもとづくヒンドゥー教の改革を行った。
- (3) ヴェーダーンタは、ウパニシャッドの別名。ヴェーダーンタ哲学は、ウパニシャッドの「梵我一如（宇宙原理ブラフマンと個我との同一）」の教説を中心として体系化された哲学で、インド伝統哲学の主流を占める。

- (4) バクティは、神に対する絶対的な帰依のこと。特にヴィシュヌ神への信仰と関係が深く、インドの宗教文化の大きな流れを形作っている。
- (5) イスラームの中の神秘主義の実践者。インドではイスラーム侵攻以来、スーフィズム（スーフィーの神秘主義）とヒンドゥー教との接近・融合が起った。
- (6) タゴールの思想を確立した「滝の目覚め」（一八八二年）のこと。
- (7) 英語版『ギタンジャリ』第一詩。森本達雄訳、『タゴール著作集』第一巻（一九八一年、第三文明社）七頁参照。
- (8) 森本達雄訳「限りなきものよ、おんみは……」。『タゴール著作集』第一巻（一九八一年、第三文明社）五七七頁参照。
- (9) 詩集『絵のような女』（一八九六年）所収「いま、われに帰れ」。森本達雄「タゴールと十九世紀ベンガルの民族覚醒」、『タゴール著作集』別巻「タゴール研究」（一九九三年、第三文明社）一三三頁参照。
- (10) 高良留美子訳「質問」。「タゴール著作集」第二巻（一九八四年、第三文明社）一五六頁参照。
- (11) 高良留美子訳「ブッダに」。「タゴール著作集」第二巻（一九八四年、第三文明社）一五八―一五九頁参照。
- (12) 「ジー」は親しみをこめた敬称。ガンディーはしばしばガンディー・ジーと称される。
- (13) 英語版『ギタンジャリ』第三五詩。『タゴール著作集』

第一卷（一九八一年、第三文明社）三二頁参照。

（14）

ベンガル語版『ギタンジャリ（ギタンジョリ）』第一

○六詩。渡辺照宏訳『タゴール詩集』（一九七七年、

岩波文庫）一五六頁。なお、アロティ・ムコパッダエ

（我妻綱子訳）「タゴールと仏教」、『タゴール著作集』

別巻「タゴール研究」（一九九三年、第三文明社）一

五六頁参照。

（バラティ・ムカジー／ラビンドラ・バラティ大学
前副総長）

（訳・まえがわ けんいち／東洋哲学研究所研究員）